河原田盛美における本草学的知識から近代勧業的実践の転換に関する研究

河原田研究班の研究課題と研究活動

研究代表者　高江洲　昌哉

河原田研究班（略称）は、東洋文庫から河原田盛美（1842-1914）の『沖縄物産志附・清国輸出日本水産図説』を刊行するために、調査・研究を進めてきたメンバーを中心に結成し、2014年度から活動を始めた研究班である。当研究班は「琉球処分」のため琉球に赴任した河原田の沖縄での経験（物産調査をおこなっている）と、水産官僚としての活躍の両方に注目し、その実践と知識の両面にわたる継続と断絶を分析することで、西欧型の専門知識を駆使する官僚が輩出される以前に活躍した河原田の活動を通して、近代日本における知識の変容と活用を明らかにすることを目的としている。

このように、本研究班の活動は、テーマとして掲げている河原田盛美の実践と知識の解明を主軸にしているが、（1）南会津の旧河原田家に残されている膨大な資料の整理という基礎作業、（2）山村地域の近代化を志向した地方実業家として活動してきた側面の解明、（3）河原田の活動を通して地域勧業政策としての水産業の近代的展開の解明という3つの柱を活動の中心にしている。

これらを有機的に結びつけることで、常民文化を活用するための歴史的な知の集積と、変化の側面、さらには地域振興という今日的課題に対応する総合的人文学研究の成果を提示したいと考えている。

2014年度は、10月と11月に南会津の河原田家の調査をおこない、3月に沖縄で調査と研究会を開催した。また先述の東洋文庫の解説において、本研究班の成果の一端を示すことができた（例えば、伊藤圭介とタイマイについて書簡でやりとりをしている事例の提示など）。また、研究協力者の小野まさ子氏の家譜調査により、琉球在勤時代に久米村の人から中国語を習っていたことも判明した。

2015年度は、これらの成果を踏まえて、引き続き南会津町の河原田家調査を実施し、特に河原田文庫目録の撮影をおこない、知の集積過程について基礎データの収集につとめている（5月と8月に実施）。また、7月4日には

写真1　沖縄での研究会風景（2015年3月開催）

神奈川大学を会場に、科学史を研究している土井康弘氏を招いて「明治期における伊藤圭介の自然研究と学術交流」をテーマに河原田の本草学に関する知識を比較史的に深める研究会を開催した。９月には鳥取県へ資料調査と研究会をおこなう予定である。

２年間という短い期間ではあるが、有効に活動して、掲げた目標を達成すべく研究班一同頑張っているところである。

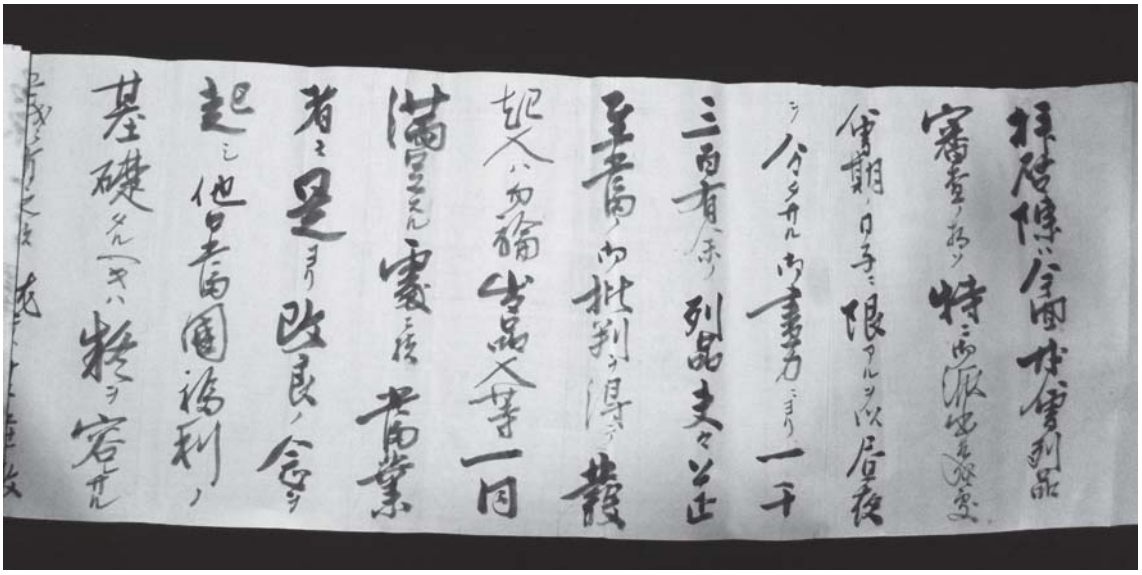

写真２　（明治 21 年４月９日）隠岐国私立水産共進会事務長伊藤石介の書簡（水産品加工に関する内容）

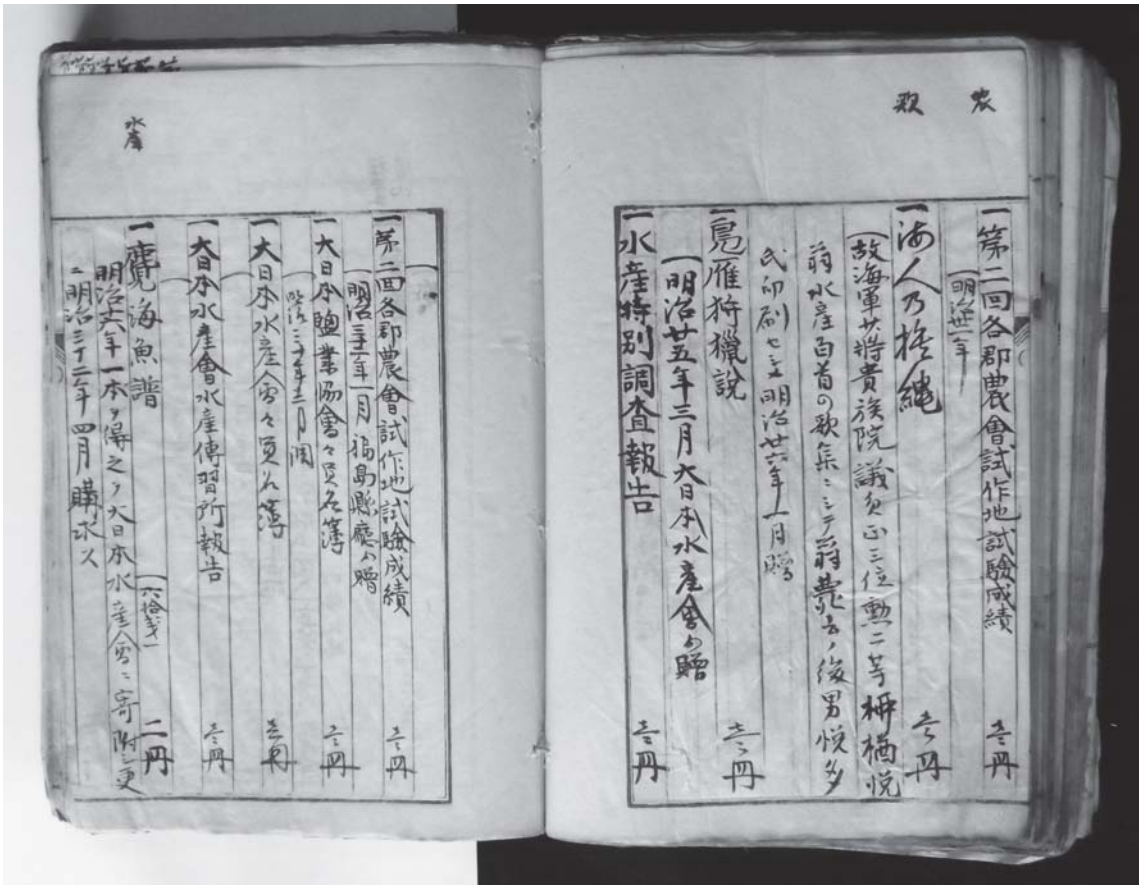

写真３『河原田文庫目録』より（『麑海魚譜』を大日本水産会に寄贈し、改めて購入したことを記している）